



自律

共想

郷生

ICT教育通信

令和5（2023）年2月7日
第8号 小郡市教育委員会

令和4年度第7回小郡市ICT教育推進委員会を終えて

市ICT教育推進ロードマップに基づいて計画した本年度7回の推進委員会が終了しました。最終回は、教育委員会と推進委員の先生方、そして、推進員同士の『熟議』を大事に位置づけ、一年間の総括と次年度への見通しを話し合いました。

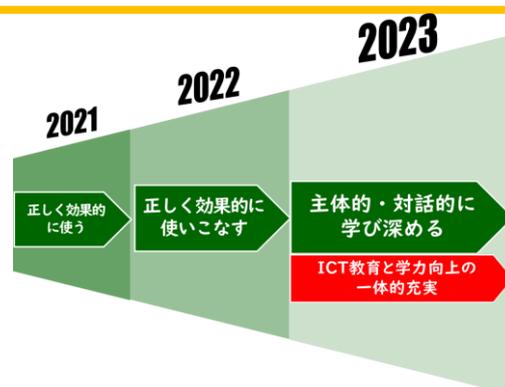
タブレットを活用した授業を浸透させるための工夫、ICTと学力の関係性、ICT活用による業務削減の実際など、大変熱のこもった有意義な意見交換ができました。

ICT推進委員は、校内推進体制の要ですので、これまでのご苦労は相当大きいものがあったと思われる。子ども達の「未来の幸せ」の実現のために、一年間、それぞれの学校を導いて頂いた真摯なご努力に対して心から感謝を申し上げます。
教育長 秋永

今回のICT教育推進委員会では、令和5年度のICT教育推進の方向性について確認しました。令和5年度は、ねらいを「**主体的・対話的に学び深める**」とし、「**ICT教育と学力向上の一体的充実**」を目指して取り組んでいく予定です。

新たな取組として、

- ① ICT教育・学力向上・校内研修の一体的取組
- ② 情報活用能力育成モデルカリキュラムの作成
- ③ 市内学校間における体験的交流研修
- ④ 「正しく判断する力」等の育成に向けた活用型情報モラル教育の推進 等を計画しています。



【グループ協議の要旨】

各学校における取組状況を交流し、さらにICT活用を推進する方策について協議しました。



【小学校グループ①：味坂小、小郡小、三国小、東野小】

- ・子どもたちのICT活用の実態に応じて、年間指導計画もアップデートしていく必要がある。
- ・タイピングを始める際には、高学年がマンツーマンで教えると効果的である。
- ・交換授業を積極的に行ってICTが得意な先生が子どもたちを鍛え上げれば、ICTが苦手な先生にも活用が広がる。
- ・ICT活用は「ジェットコースターのように上るまで（慣れるまで）はきついが、上がり切ったらICTの方が楽」である。



【小学校グループ②：御原小、立石小、大原小、のぞみが丘小】

- ・インターネット上の写真等を活用する際には著作権についても指導する。
- ・小学校でのタイピングは、鉛筆の持ち方を正しく覚えるように、スピードよりもホームポジションを大切に指づかいをしっかりと覚えさせることが大切。
- ・研修の進め方については、60分の研修よりも毎週10分間のミニ研修を小刻みに行うことが効果的。



【中学校グループ：宝城中、大原中、立石中、小郡中、三国中】

- ・中学校では欠席した生徒への授業のオンライン配信が計画的に行われており、TeamsやZoomを使って行っている。
- ・テスト後の模範解答をTeamsファイルに入れておくとうよい。
- ・タブレットを活用した授業改善の浸透のために、三国中と大原中ではタブレットを使った公開授業を全員が年1回行っている。
- ・（次の授業をスムーズに始めるために）始業時にタブレットを起動した状態にしておくとうよい。

【ICT教育推進委員の先生方の感想】

- ・質問の時間も入れて市の取組を説明してもらい、大変分かりやすいただけではなく、納得できたので、先生方にも周知できると思いました。各小・中学校との情報交換で、小・中を見通した年間指導計画に向けてヒントが得られました。
- ・今後お互いに学校間の異動があったとしても、市の教職員全員でICTの有効性を考え、推進していくことが重要だと考えさせられました。
- ・味坂小、大原中の年間指導計画を来年度の参考にさせていただきたいと思います。また、来年度に向けて学力向上担当の先生方と連携し、方向性を考えていきたいです。
- ・タイピングにしても操作にしても、どんどん使って慣れさせていくことで、子どものスキルアップ、学力向上、先生方の負担軽減につながっていく。
- ・情報モラル教育の「リスクのグラデーション」という考え方がとても興味を持ちました。どうしても教え込みになったり、他人事としてとらえさせてしまったりするので、自分事として考えさせ、危険度について互いの考えを交流させることが大事だ。
- ・ICT活用と学力向上の関連性について分析したいと思いました。
- ・中学校における各教科（できれば全教科）でのICTを活用した授業を一つでも多く見てみたいです。
- ・ICT教育推進委員会での内容は、管理職、育成部内には確実に伝えていたが、全職員への周知が徹底できていなかった。今日確認があった「ICT通信」を活用し、全職員への周知をしていきたい。



ICT教育推進委員会 委員長 味坂小学校 校長 江上 征一

《1 学力とタブレット活用との関係について》

学習活動の中でタブレットを活用することが、児童生徒の学習意欲の向上に繋がることは明らかになってきました。また、どの学校でもタブレットを活用した授業実践が数多くなされています。12月に実施した「標準学力調査」の結果では、ほぼ毎時間タブレットを活用した学級において、昨年度と比較し10ポイント以上上昇したという成果が複数見られています。

《2 タイピング能力の育成について》

タイピング能力の育成については、帯の時間を活用してタイピング練習の時間を確保する、隙間時間や課題が終了した後に自由にタイピングの練習をしている等の事例がありました。効果的なのは、児童生徒が常に自分の手元にタブレットを持ち、自分でいつでもタイピング練習をすることができる状況をつくっておき、競争ではなく自分の伸びを実感できるようにすることです。大切なことは「いつでも、自分から」タイピングに慣れさせることです。勿論、まずはホームポジションの指導は行わなければなりません。

《3 小・中の連携について》

小・中学校での実践等は交流できてきましたが、情報活用能力の育成という視点では、小学校でどこまでの力をつけて中学校に送り出すのか、中学校ではどこからスタートすればよいのか、明確になっていないのが現状です。現在、小郡市では、情報活用能力育成指標の作成に着手しています。児童生徒の情報活用能力を9年間で育成するためには、各中学校区でのICT教育担当者連絡会等をもち、連携してカリキュラムを作成することがとても重要になってきます。また、来年度の年間指導計画の中に、情報活用能力育成を視野に入れた計画を各教科・領域等の中にちりばめておく必要があります。

児童生徒が生きていく未来は、想像もつかないほど情報化が進んでいることでしょう。そんな社会に飛び込んでいく児童生徒の将来への展望を拓くためには、情報活用能力を育成しておくことが大切です。「今」は大変かもしれません。しかし、「今」ととどまらず、児童生徒の「将来・未来」の姿を見据えて取組を進めましょう。

堀田龍也 東北大学教授の講話より

令和4年度福岡県教育センター研究発表会 R5. 2. 3

<これからのICT教育の推進について>

- 学習者である児童生徒自身が「学びを最適化」することが大事。「自分の学び方」がうまくいっているのかどうかを振り返ること。うまくいったのであれば何がよかったのか、足りなかったのであれば次はどうすべきか、児童生徒自身が「学びを自己調整」できるようにすることが重要。
- 児童生徒は、正解の見えない不透明な時代を生きていかねばならない。学習方法を自分で選り判断する学び（自己選択・自己決定）の進め方を、誰かに頼ってられる今、積み重ねさせておくことが大事。自分のペース、自分のこだわりで主体的にICTを活用する学びを実現したい。